

早稲田大学
図書館所蔵 蔵書印譜私稿 (一)

大江 令子

まえがき

- 一、本稿は本館所蔵資料に見られる蔵書印を紹介するものである。
- 一、従来の蔵書印譜等に紹介される機会の少なかったもの、或いは、本学及び本館に関係の深いものから掲げることが心かげ、やがて他へも及ぶつもりであるが、いまだ印影採集の緒にいたばかりであり、系統立てての紹介はなし得ない。偏に印影の紹介を眼目とし、年代・分野等に捉われず掲出することとした。
- 一、排列は人名(印の使用者名)の五十音順とする。
- 一、印影は原則として原寸大とする。印色は個々の原色を再現するは困難なため、朱・墨等、近似の色を以って示した。
- 一、必要と思われるものには印文の読みを記した。
- 一、印の使用者の経歴等、簡略な解題を付した。参考文献は一々あげないが、既刊の事典・印譜・評伝等を参照した。
- 一、解題末尾に、印を採集した資料名を添えた。

本来、このような蔵書印譜は、博搜の材料を基に、周到な調査のうゑに編まれるべきものであり、本稿のように、本務の傍ら、印影採集の作業を併行しながら、倉卒のうちに稿を起すなどは、軽拳という他はない。よって、印の使用者の認定、印文の読み、解題など、多々誤謬があると思われるが、大方の御指摘、御叱正を待ち、随時訂正する所存である。さらに、館蔵資料中の蔵書印の所在、また広く蔵書印とその使用者についての御教示を賜われれば幸いである。

本稿作成にあたり、館内外の諸氏より種々のご助言を戴きました。ご好意に感謝し、併せて、今後ともご助力を賜われますようお願い申し上げます。

(おおえ よしこ 図書館特別資料室)

目次

新居守村	信夫恕軒	豊嶋由誓
今尾清香	島田蕃根	中院通枝
尾佐竹猛	杉原心齋	奈河晴助
賀茂季鷹	醍醐忠順	平瀬露香
草鹿砥宣隆	竹添井々	藤野古白



「新居庫」

新居 守村 (一八〇一—一八五三)

国学者。文化五年上野国甘楽郡に生れる。通称又左衛門、又三郎。生家は小幡藩の用達を勤める富商。初め父の感化により狂歌師浅草庵の門に入るが、語法語格研究上の必要から、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤諸家の著書に親しむ一方、江戸の桜井光枝に音韻学を学ぶ。のち若狭国小浜妙女寺住職義門大徳に国学を修め、義門亡き後は黒川春村と交わり、皇典学を深めた。『四海祖国考』『気象考』『易故新』『復古八卦方位弁』等多数を著わす。維新の後、貫前神社、笹森稻荷社の祠官、皇典講究所委員、権中教正等を歴任奉職、神道及び皇学の普及発達に多大な貢献を成した。明治二十六年没。

『筑波根於呂志』写本

奈淫志古曾能爾乎左
年留布美良乃思流之

今尾 清香 (一八〇五—一八七三)

国学者。文化二年下野足利に生れる。通称逸平、罌麥園と号す。医家祐庵篤信の子に生れるが、のち養家に入り、今尾姓を襲う。国学を橘守部に学び、歌学、国語学、古典に精通した。『源氏物語萍中の月』『道行ぶり』『賤緒環歌集』『日本紀莠霊』『草津記行』『足利職人尺歌合』『四時そぞろあるき』等を著わす。その門に入る者八百余人を数えた。明治六年没。

掲出の蔵書印は万葉仮名により「ナゲシコソノニヲサ
ムルフミラノシルシ」と読ませるが、いかにも国学者の
印らしく思われる。

『伽婢子』寛文六年刊



「雨花
文庫」

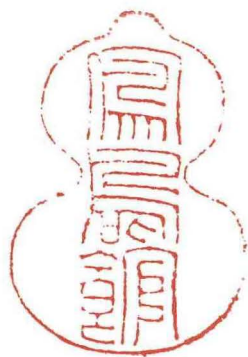


尾佐竹 猛 (一八〇一—一九四五)

判事、明治史家。明治十三年石川県に生れる。雨花または雨華と号す。明治三十二年明治法律学校卒業。二十歳で判検事登用試験に合格、東京、福井、名古屋の地方裁判所を経て、大正十三年大審院判事となる。本務の傍ら、昭和十三年衆議院内に設置された憲政史編纂会委員長をつとめ、また、東京帝国大学、明治大学等に教鞭を執った。大正十三年吉野作造、宮武外骨らと明治文化研究会を結成、『明治文化全集』『幕末明治新聞全集』等の編集刊行に尽した。『日本憲政史大綱』『維新前後における立憲思想』等著書多数。昭和二十一年没。

掲出の二顆は柳田泉文庫中の『新体詩林』より採集したが、同書に記された柳田泉の識語には、「昭和五年四月十四日／明治文化全集編輯会之夜／尾佐竹猛博士被贈」とあり、尾佐竹、柳田両氏の交遊が偲ばれる。

『新体詩林』明治十八—十九年刊



「鳳鳥館」



「季鷹」



「賀茂縣主」

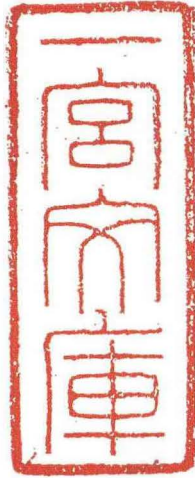
賀茂 季鷹（七五二—八四〇）

歌人。上賀茂社祠官。本姓山本氏。宝曆二年生れ。雲錦、生山と号す。はじめ有栖川織仁親王に和歌を学ぶ。十九歳で江戸に下り、加藤千蔭など当代の歌人、文人と広く交わる。三十八歳の春婦京、上賀茂社祠官となる。香川景樹とともに化政・天保期の京都を代表する歌人であり、狂歌も能くした。家集に『雲錦翁家集』、他に『美阿礼の百草』『雁の行かひ』『万葉集類句』等の編著がある。天保十二年没。

季鷹の蔵書印として、この他に、「歌仙堂記」の印（陽刻長方朱印）と、掲出の「鳳鳥館」印のひとまわり大型のもの、二顆が確認されている。

『ふみ合』写本

『民部省図帳』写本



草鹿砥 宣隆 (二八八—二八九)

国学者。文政元年尾張一宮に生れる。通称勘解由、近江、別に崧とも称した。家は代々鹿砥神社の神主をつとめた。幼くして漢学を修め、十七歳の時より平田篤胤の下に皇学を学ぶ。天保六年従五位下、近江守に任ぜられ、私塾楹之金門を開き皇学を教授、明治元年京都の皇学所講官となった。神典及び異体の和歌の研究に努め、『施頭歌抄』『天門抄』『長歌対句類聚』『万葉集序歌抄』『祭典略附祭文例』『祠堂祭儀』等を著わした。明治二年没。

『装束図式別図』写本



「奇文欣賞書樓之印」



「恕軒氏藏板」



「恕軒清玩」

信夫 恕軒 (一八三一年—一九一〇)

漢学者。鳥取藩士。天保六年江戶藩邸に生れる。名は榮、字は文則。恕軒、天倪と号す。海保漁村、大槻磐溪、芳野金陵に経史及び文辞を修む。明治初年東京本所に奇文欣賞塾を開く。同十三年東京帝国大学講師となるが六年にして辞す。二十三年東京専門学校文学科開設と同時に講師に招かれ、『史記』を講じた。市島春城の『隨筆早稻田』によれば、恕軒は早稲田に来てから後も、帝大時代と同様、常に酒気をおびて登壇、その弁才により満座をして耳を傾けしめたが、「一時間一圓の報酬では精講は出来ない」と氣箠を吐いたりしたという。著書に『恕軒文鈔』『恕軒漫筆』『赤穂誠忠録』がある。明治四十三年没。

本館には大正三年信夫淳平氏（恕軒長子、大正六年本学講師）によって恕軒旧藏書千余冊が収められた。なお、「恕軒氏藏板」の印は印文からして藏板印と思われるが、偶々『周易古占法』巻頭に「奇文欣賞：」印と並列してあり、参考に掲げた。

『周易古占法』天保十一年刊
『西碑雜纂第一集』明治九年刊

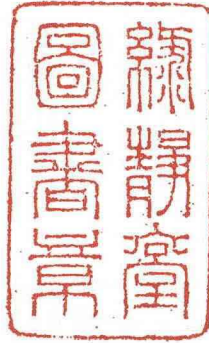


「吐佛」

島田 蕃根 (一八七〇—一九〇七)

仏教学者。文政十年周防徳山に生れる。初名は円真。家は南朝の遺臣島田良義を祖とし、代々修験道を奉ず。十八歳で天台宗本山派の修験道に通じ法印に叙せられた。のち伊予妙心寺の晦巖に禅を学び、三井寺で仏教各宗の要義を修めた。維新に際し還俗して毛利氏の藩学興讓館の教授となり、藩主元蕃の一字を授かり名を蕃根と改む。明治五年上京、教部省に出仕、宗教制度、寺社の調査等に当たった。同十二年内務省社寺局に奉職、以後内閣記録局、修史局等に出仕した。同十三年、増上寺の福田行誠らと共に『縮刷大藏経』の刊行を企て、弘教書院を設立、宋・元・明・高麗等の大藏経各版を対校、五年の歳月を費し、四百十九冊の大出版を成し遂げた。常に仏書の蒐集につとめ、その保存に意を用いた。明治四十年没。

『医療手引草上編坤』明和九年再版



「緑静堂
圖書章」



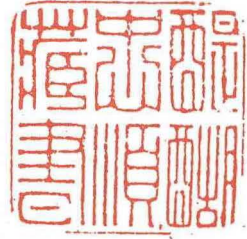
「心齋」

杉原 心齋（一八六）

徳川末期の儒者。江戸の人。名は直養、字は浩然、通称平助。心齋、緑静堂と号す。昌平黌に入って、佐藤一斎、安積良斎に程朱の学を修め、のちに儒官となる。考証に長じ、岡本況斎と深交を結んだ。性謹直、平素より諸事儉約を旨とし、常に貯蓄を成した。以って書物の蒐集にはげみ、宋元の古版を多数所蔵した。『威雅』『数雅』『彩雅』等を著わす。慶応四年没。

『国朝諸老先生論語精義』享保十四年（後刷）

『科条虎卷』写本



「醍醐
忠順齋
藏書」



「醍醐
藏書」



「忠順
珍賞」



「忠順
之印」



「醍醐
藏書」

醍醐 忠順 (1831-1900)

政治家、参与。天保元年生れ。父は内大臣輝弘、母は関白鷹司政熙の女。天保二年二歳で従五位下に叙せらる。以来連年累進し、維新前には正二位、権大納言。明治元年参与を拜命、内国事務掛、大阪鎮台督、大阪裁判所総督を兼務、二男忠敬と共に奥羽討伐に軍功をあぐ。ついで大阪府知事等要職を歴任、同年十二月一条美子(昭憲皇太后)が皇后に立つに及び、皇后宮大夫に任せらる。その後侍従、侍従番長として天皇の側近に任せ、二十三年国会開設にあたり貴族院議員に列した。のち侯爵を授かる。明治三十三年没。

本館には、明治三十三年八月寄贈の遺蔵書多数を架蔵している。

『標注令義解校本』明治刊

『論語論文』明治十八年刊

『博物新編』明治九年刊



「竹添
光鴻」



「井井
居珍蔵」

竹添 井々 (一八三二—一九一七)

外交官、漢学者。天保十三年肥後天草に生れる。儒者竹添荀園の四子。名は漸、字は光鴻、進一郎と称した。十四歳で木下犀潭に入門、木村弦雄、井上毅、古荘嘉門と共に木下門下四天王と称された。のち熊本藩校時習館の訓導となり、維新後、大蔵省に出仕、天津領事、朝鮮弁理公使等を歴任、明治十七年京城の変に遇う。致仕後は東京帝国大学に経書を講ず。二十八年退官後は読書著作を専らとし、『左氏会箋』『毛詩会箋』『論語会箋』等の著作を相ついで刊行、その功績により大正三年学士院賞受賞、文学博士号を授与さる。大正六年没。

井々の蔵書印として、掲出の二顆の他、現在、十余顆が知られている。なお、井々の遺蔵書は静嘉堂文庫に約五〇〇点が伝存している。

『春秋五測』清版

『春秋通論』清版

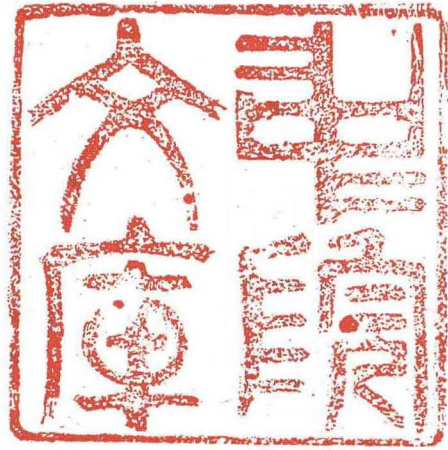


「岡田」

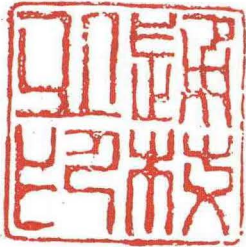
豊嶋 由誓 (二七九—二五九)

俳人。寛政元年生れ。江戸の人。通称久蔵。号坎窩久蔵、為誰庵、凌雨堂など。浅草蔵前の札差井筒屋(俳人夏目成美の家)の番頭で、四十歳年長の成美に俳諧を学んだ。のち俳諧を業とし、天保頃には江戸俳壇一方の雄となった。請われて序・跋文を草すること多く、また、友人の岡野湖中が芭蕉の全作品を集成しようとして『一葉集』編纂を企てたが、共編者仏今の死により苦境に立たされたのを見て、これを助けて校閲、刊行せしめた。この他関係編著は、『其角発句集』(考訂)、『成美家集』(補訂、成美の子らと刊行)、成美追善の『三霜集』(序)、成美文集『四山藁』(子らと編集刊行)、一具との共著『十題発句合』等がある。由誓はまた古俳書の蒐集にとり、自ら多くの俳書を筆写して蔵書に加えたという。没後、三周忌に句集『為誰集』、七周忌に『由誓文集』が編まれた。安政六年没。

『まひのは集』元禄十四年跋



「中院
文庫」



「通枝
之印」

中院 通枝 (七三一—七三九)

公卿、権中納言。享保七年生れ。初名は茂栄、のち通枝と改めた。中院家は本姓村上源氏、大臣家の一、和歌の家として知られる。通枝は右大臣通躬の男、実は権大納言正二位藤原通夏の次男。享保十三年叙爵、ついで従五位上侍従に任じ、十八年元服、禁色昇殿を聴され正五位下に叙せらる。寛保三年正四位下参議、延享元年従三位、同二年権中納言に任ず。四年正三位、春宮権大夫を兼任。寛延元年左衛門督を兼ね、使別当に補せらる。宝暦三年没。

「中院文庫」の印は中院家の文庫印で、他に同文の別印も知られている。掲出印については用いられた年代等確認していないが、一応ここへ併出しておく。

『作者部類』写本

奈河晴助

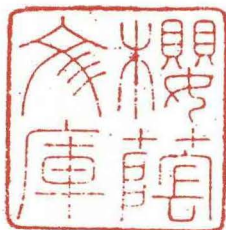
大崎之内
奈河晴助
坂布袋町

「大 嶋之内
奈河晴助
坂布袋町」

奈河 晴助 (二七三—二八三)

上方の歌舞伎狂言作者。天明二年京都に生れる。通称宮島屋嘉兵衛。素人俄狂言の作を好み、初代奈河篤助の門に入り狂言作者となる。初め京都道場因幡薬師芝居をつとめたが、西沢一風の父西沢利右衛門の斡旋で大阪の大芝居に転じた。のち師の江戸下りの後を受けて立作者格に進み、以後二代嵐吉三郎の専属作者となる。文化八年二月前名春助を晴助と改名、同年三月角の芝居の『紅彩色京曆』が初作といわれる。時代・世話ともにこなし、京阪劇壇の筆頭作者として活躍した。その作の多くは吉三郎はじめ四代嵐小六、浅尾工左衛門、市川蝦十郎らの名優によって当りを取り、後年まで繰り返し上演された。文政八年豊晴助と改名。著名な作に『けいせい筑紫鞆』、『濃紅葉小倉色紙』など。文政九年没。

『一心五戒魂』宇治加賀掾正本、元禄十六年刊



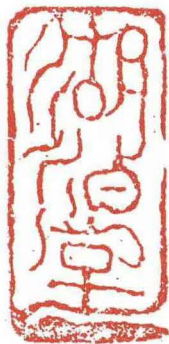
「櫻蔭
文庫」

平瀬 露香（一八三〇—一九〇八）

天保十年大阪屈指の富豪、両替商千草屋に生れる。名は春愛、通称亀之助、別号は桜蔭、三亥子、千種廻家など多数。慶応二年二十八歳で家督を相続、七代目となる。維新の後、平瀬一族を統合して設立した第三十二国立銀行の頭取となり、日本火災保険会社社長、大阪博物館初代場長等の役職に名を列するが、一切の実務につかず、生涯を風流韻事に送り、稀代の粹人、数寄者としてきこえた。禅、漢学、国学、和歌等諸学を修めたが、中で神道を重んじ、中教正にまでなった。能は金剛流、茶は官休庵、不昧の二流を極め、書画、俳諧、音曲等百芸に通じ、維新後急激に衰頹した各種芸能を擁護、その伝統を支えた。明治四十一年没。

平瀬家の蔵書は昭和十六年村口書房、中尾松泉堂を札元として売られた。反町茂雄編『紙魚の昔がたり昭和篇』によれば、この時処分された蔵書には「千種文庫」なる小型の朱印が押されていた由であるが、未見。

『にぎはひ草』元和二年刊



「湖泊堂」

藤野 古白 (一八七一—一九五七)

俳人。正岡子規の従弟。明治四年伊予浮穴郡久万町に生れる。本名潔、別号湖泊堂、壺伯など。明治十三年一家と共に上京、のち東京専門学校文学科に入学。同級に島村抱月、後藤宙外がいた。子規の感化により俳句に志したが、二十八年四月自らその生涯を閉じた。ピストル自殺であった。幼時より神経症的傾向の強かった古白は、子規にとっては扱いにくい従弟であり、文学を志す者同士の軋轢もあったというが、子規の『仰臥漫録』（明治三十四年十月十三日の記）に、錐と小刀の絵の傍らに「古白曰来」と書き入れてあるなどは、子規の古白に対する心情の一端を窺うに足る。明治三十五年子規によって『古白遺稿』が編まれ、俳句三百一句、和歌五首、戯曲「人柱築島由来」をはじめとする、古白の文業のほぼ全容が集成された。

明治四十一年、古白の愛蔵書は、在籍のまま逝った母校の図書館へ、父、漸氏によって寄贈された。

『温故日録』元文四年刊

